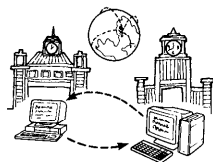


巻頭言



プロフェッショナル・ソサイアティとしての学会

米田 英一†



今年の4月にIEEE幹部と我が国の電気関連5学会+応用物理学会の会長との懇談会が開催された。グローバル戦略を進めつつあるIEEEとしては、日本の関連学会と協調路線をとった方がスムーズに事を運ぶことができるので、そのためにも互いに自由な意見交換をしようということであろう。また、これに先立って、3月に東京理科大学で開催された全国大会の場では、IEEE-CSの会長カレダ女史以下の人達と水野会長以下の懇談会が開かれた。国際担当理事として、この二つの懇談会に会長の代理で出席したり陪席しているいろいろ考えさせられるところが多かった。

一つは、IEEEあるいはIEEE-CSの財務体質の強さである。IEEE-CSについていえば、会費収入は予算収入の8%に過ぎず、会の運営のための費用の半分以上を出版物や国際会議などから得ているのである。英語を母国語としている強みをイヤというほど痛感したが、本稿で述べたいのはこれとは別の話である。

いうまでもなく、IEEEは傘下に数多くの専門学会（テクニカルソサイアティ）を抱えるアンブレラ組織である。4月のIEEE幹部との懇談会に出席して痛感したことは、IEEEが学会である前に職業人（プロフェッショナル）協会であるということであった。これはIEEEの正式の名称の邦訳が『電気電子技術者の協会（組織）』とあることから明らかである。instituteという英語は研究所と訳されることが多いが、OEDを調べれば分かるように、元来の意味は『何かを推進・促進するための組織』であり、『何か』には学問・研究だけではなく、職業上あるいは教育上の目的なども含まれる。その証拠に、IEEEの目的・ミッションの中には、「電気電子技術者の社会的地位の向上」、「電気電子技術（の有用性）に関する社会一般向けの啓蒙」、「メンバの生涯教育」、「職業（人としての）倫理」などが中心に据えられて

いる。

翻って我が情報処理学会を考えるとどうか。「学会の主たる目的は学問研究成果の発表の場を提供することにある」と言われることは多いが、理学部系の学会や応用物理学会のように会員の大多数が学者・研究者であるような学会の場合とは異なり、実務に近い分野を対象とする学会の場合には、学者・研究者会員よりも設計技術者やSEなどの実務家会員の方がはるかに多いはずである。言い換えれば『論文を書かない会員』の占める比率が非常に高いはずである。しかし、世界を相手にした出版ビジネスなどの望みにくい我が国の学会の場合には、これら『論文を書かない会員』は学会を維持・運営して行く上で大切にしなければならない人達である。一方、これら多数派の会員の日常の仕事が、学問あるいは最先端技術の恩恵を受けることも、間違いのないところであろう。両者はお互いに持ちつ持たれつの関係にある。

バブルの崩壊とともに会員数の伸びが止まっている。残業制限等に起因して多くの若手技術者の可処分所得が減ってしまった現在、草の根的会員に対するサービスを怠っているのは会員数の増加どころか減少さえ招きかねない。学会誌編集担当理事他の方々のご努力のお蔭で、学会誌の中に一般の会員にとっても興味ある解説記事が増えつつある。また、本年度はテーマが時宜を得ていることもあって連続セミナーの受講者も昨年度より増えている。しかし、多数派会員に対するサービスとしてやるべきことはまだまだ多い。我が国でも、多くの企業がリエンジニアリングを叫び、一部企業では年俸制が導入されようとしている。年俸制の時代とはプロフェッソナリズムの時代である。そういう社会においてはIEEEのような職業人協会は極めて心強い味方のはずである。情報処理学会も職業人の生涯教育・自己研鑽の場という側面を持つように変身して行く必要はないだろうか。

（平成6年7月19日）

†本会理事 （株）東芝